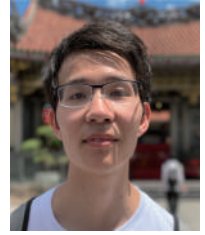


人と街を結ぶ、交流の丘  
- 松戸駅前における滞留空間の創出 -

AJ16016 石橋 捷矢  
指導教員 岡野 道子



### 01. 更新の進まない松戸駅東口市街地

私の生まれ育った千葉県松戸市は東京から20kmの立地を活かし、地方と東京を結ぶ拠点としての役割を果たしてきた。市の南西部に位置する現在の松戸駅周辺では、江戸時代には宿場町として栄え、高度経済成長期には地方から東京へ働きに来る人々のための住宅が大量供給されるなど、経済の中心である東京に合わせて松戸はその姿を変えてきた。しかし、1970年頃に形成された現在の松戸駅市街地は、都市機能の老朽化が問題となっている。また、市の郊外には大型商業施設が出店されたことにより、このままでは市街地の**利用人口の分散→人の活気や賑わいの低下→駐車場等の未利用地の増加→街の魅力の減少**に繋がると考える。



松戸宿と舟運



松戸金町閑所

### 02. 台地再生—相模台台地と駅を繋げる導線を作る—

計画地である松戸駅東口駅前には、相模台台地という広大な自然が存在している。この場所は、明治時代から競馬場→陸軍工兵学校→千葉大学工学部と様々な用途で利用され、現在では松戸中央公園と聖徳大学等の教育機関となっている。しかし、**市街地とは22mもの高低差が存在し、街の中心地である松戸駅との繋がりが弱いことや松戸駅との導線上に商業施設が立ち上がり、隣接しているはずの街と自然との結びつきが乏しい。**松戸を活性化するための地域資源として、市外の入り口となる松戸駅と街の骨格である、相模台台地を視覚的に繋げる。



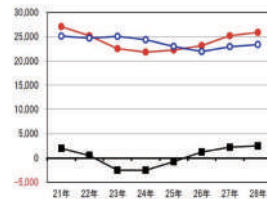
商業施設“プラレレ松戸”



相模台台地

### 03. 台地と共に生まれる、一人一人の居場所

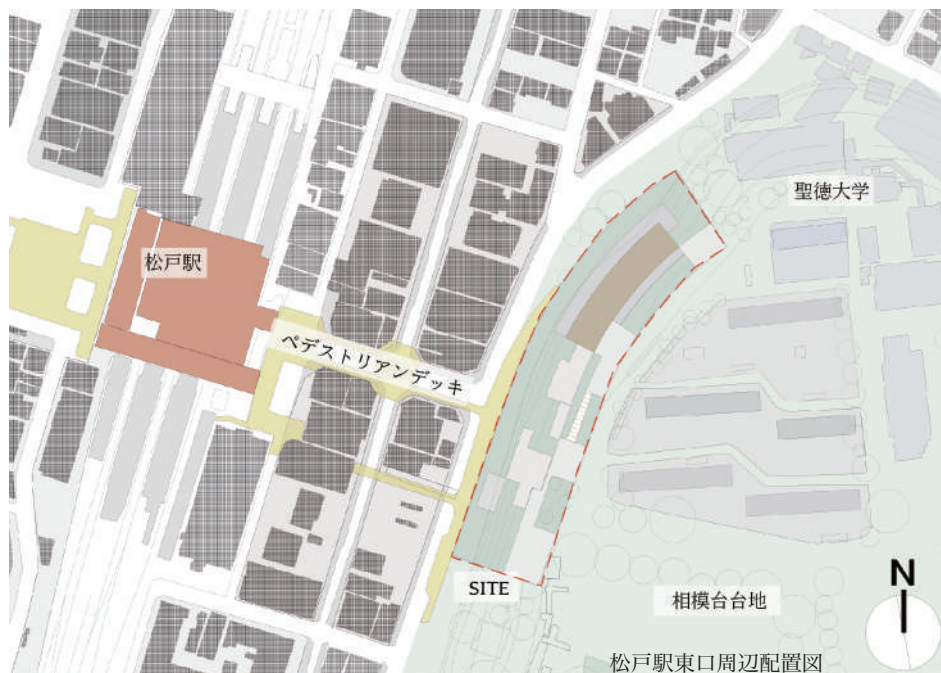
松戸で活動する市民活動団体やNPO法人は数多く存在し、近年では、アーティストインレジデンス等の松戸を題材としたクリエイティブな活動をする企業も増えている。学生や企業、子育て家族等、**多世代に渡る様々な人が行き交う街として、新たな松戸の文化が生まれようとしているのではないかと。**松戸駅とともに行き交う場所から人や文化の集まる滞留の場所を作る。



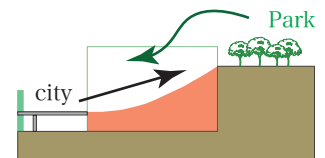
転入者の増加



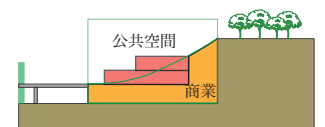
文化交流の機会



ベデストリアンデッキ（以下ベデ）の終着点として存在する商業施設。松戸駅から相模台台地の緑が確認できず、街が分断されている。



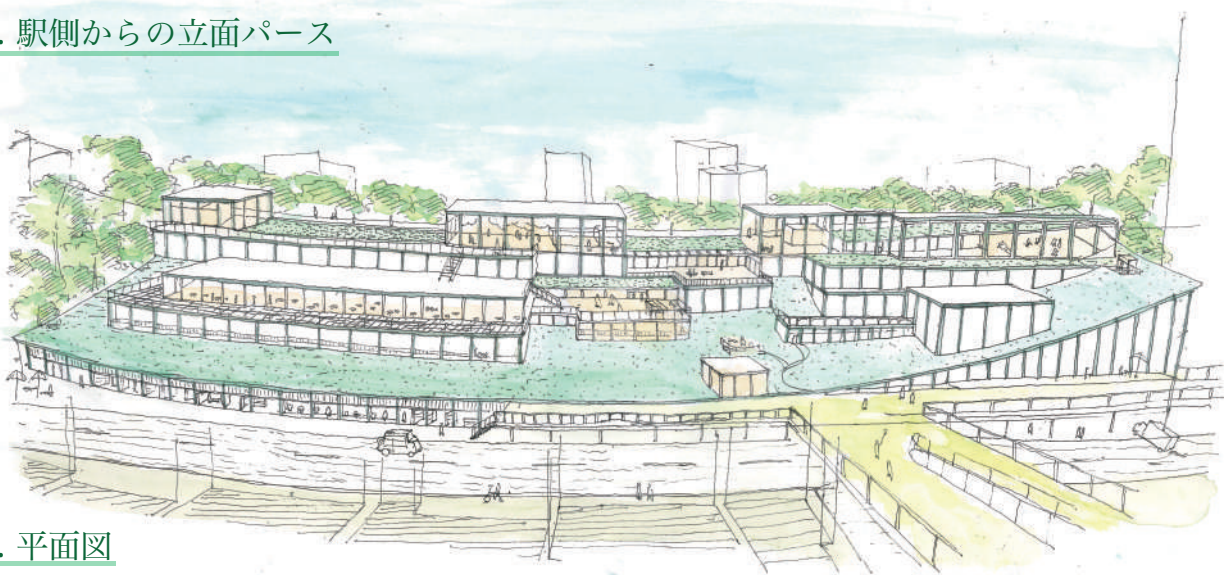
ベデから緩やかに結び、本来の台地を作り出す。駅からは相模台台地の緑が広がる。



商業施設としての機能を残しつつ、ポテンシャルとなる場所を丘に沿って配置していく。

千葉県松戸市は東京と地方を結ぶ分岐点の役割を果たしてきた。1970年代の再開発で形成された現在の松戸駅周辺市街地は老朽化が進み、都市機能の更新が問題である。本計画では、再開発によって埋もれてしまった自然の地形を取り戻し、松戸駅とともに多種多様な人々が集まる新たな街の中心地を作る提案である。計画地である、相模台台地と松戸駅に生じる、高低差を丘で繋ぎ、人の活動が街に広がる文化拠点とする。

#### 04. 駅側からの立面パース



#### 05. 平面図

